

山梨県北杜市明野町上神取
諏訪原遺跡発掘調査概報
2008年度



2008.12

昭和女子大学人間文化学部
歴史文化学科

例　　言

1. 本書は、山梨県北杜市明野町上神取1558-1に所在する諫訪原遺跡の2008年度発掘調査概報である。
2. 発掘調査は、2008年8月4日から15日まで実施した。
3. 発掘調査は昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科が主体となり、山梨県教育委員会・北杜市教育委員会の指導のもと、昭和女子大学大学院生・学部学生が参加し実施された。
4. 発掘調査は、昭和女子大学大学院生活機構研究科教授 山本輝久・同人間文化学部歴史文化学科准教授 小泉玲子が担当した。
5. 発掘調査は、文部科学省による「平成20年度私立大学等経常費補助企特別補助」にかかる「教育・学習方法等改善支援」に申請し、採択された研究課題「縄文時代における線状集落址形成過程の研究」(申請者 山本輝久)の補助金により実施された。
6. 諫訪原遺跡の発掘調査は今後とも、毎年、夏季休暇期間を利用して継続的に実施する予定である。
7. 発掘調査により発見された遺物は、現在、昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科において保管中であるが、正式な発掘調査報告書が刊行されたあと、北杜市教育委員会に返還する予定である。
8. 本調査概報は、調査参加学生の協力を得て出土品整理および実測図面の整理・トレースを行い、山本輝久および大学院生の原稿にもとづき、小泉玲子と山本輝久がとりまとめた。
9. 発掘調査にあたっては、山梨県教育委員会・北杜市教育委員会のご協力をえたほか、下記の方々からご指導いただいた。あつく感謝したい。
佐野 隆(北杜市教育委員会)、植村学(山梨県立博物館)、植村未来、石井 寛(横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター)・中川二美(横浜市歴史博物館)

目　　次

1. 調査経緯	1
2. 遺跡の位置	2
3. 調査経過	3
4. 発見遺構と遺物	5
5. まとめ	17

挿図目次

図1 遺跡の位置	2
図2 調査地区全体図	4
図3 C-D-6グリッド 平・断面図	6
図4 B-5・6グリッド 平・断面図	9
図5 B-7グリッド 平・断面図	13
図6 B-7グリッド 4号土坑平・断面図	15

1. 調査経緯

昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科は、2007(平成19)年度より、山梨県北杜市明野町上神取に所在する绳文時代中期の集落址である諏訪原遺跡の学術調査を開始した。

調査初年度にあたる2007(平成19)年度は、夏季休暇期間を利用して8月6日から17日にかけて調査を実施し、予想に違わず绳文時代中期の堅穴住居址2軒、土坑、中世末から近世期と思われる道路状遺構等が確認され、多大な成果をあげることができた。その調査結果の概要については、別に報告済み(昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科編 2007)があるので、それに譲るが、確認された遺構の調査が中途で終了したため、2008(平成20)年度は、その継続調査と新たに調査範囲を拡張し、さらなる遺構の確認調査を実施することとなったものである。

調査の対象地は、諏訪原遺跡が所在する上神取集落内の上神取1558-1番地(土地所有者 村田勝海)の約700m²である。この調査対象地は、かつては養蚕のための桑畠であったが、現在は桑栽培は放棄され雑草地となっていた。昨年度の調査の際に、北杜市教育委員会のご厚意により重機を用いて、桑の抜根や雑草が除去され更地となっていたが、調査・埋戻し後約1年間を経過して、再び雑草が繁茂していたため、北杜市教育委員にお願いして事前に草刈りをしていただくこととなった。

調査にあたっては、文科省の「平成20年度 私立大学等経常費補助金特別補助」にかかる「教育・学習方法等改善支援」に、「绳文時代における農状集落形成過程の研究」(申請者 山本暉久)とする課題で申請し、採択された補助金を調査費用にあてることとした。なお、この補助金は、平成17年度に「私立大学教育研究高度化推進特別補助」(平成19年度より「私立大学等経常費補助金特別補助」に統合)にかかる「教育・学習方法の改善」に申請し、採択された4箇年の継続課題であり、平成20年度はその最終年度に相当するものである。

今年度の調査は、昨年度と同様、夏季休暇期間を利用して、8月3日現地設営、4~15日発掘調査、16日撤収の予定で調査を実施することになった。参加学生は大学院生活機構研究科生活文化研究専攻生と学部歴史文化学科学生のうち、考古学関連科目を受講する学生を主体とし、短期間であるが卒業生も参加することとなった。宿舎はこれまでと同様に、韮崎市穴山町にある旅館「穴山温泉旅館見莊」とし、遺跡現地への往復には、マイクロバスタクシーを利用することとした。このような経緯を経て、土地所有者である村田勝海氏の承諾をえて、北杜市教育委員会の指導のもと、発掘調査に至ったものである。



写真1 遺跡遠景 塩川右岸から



写真2 発掘開始前の現況 2008.8.4

2. 遺跡の位置

遺跡は、山梨県の北方に位置し、山梨県北杜市明野町(旧・北巨摩郡明野村)上神取1558-1番地に所在する(図1)。標高約550m、塩川左岸の河岸段丘面に広がる遺跡で、東側には標高1700mを越す茅ヶ岳・金ヶ岳の雄大な山麓が広がり、北西には八ヶ岳山麓、南西方向には、南アルプスの山々が望まれる風光明媚な場所に位置している。これまでの調査結果によると、「茅ヶ岳山麓でも最大級の規模を誇る」とされ、「遺跡の広がりは2万m²以上におよび、100軒を優に超える住居址が埋蔵されていると考えられる」(佐野 1996)、縄文時代中期の大規模な拠点的環状集落址である。

養蚕業不振により桑の栽培が放棄され、それに変わって、畑地への転化や宅地化が進みつつあり、そうした状況の中、桑の抜根による遺跡破壊に対処することを目的として、明野村教育委員会により、1992(平成4)年から2003(平成15)年にかけて8次にわたる発掘調査が断続的に行われてきた(佐野 1996・2003・04)。

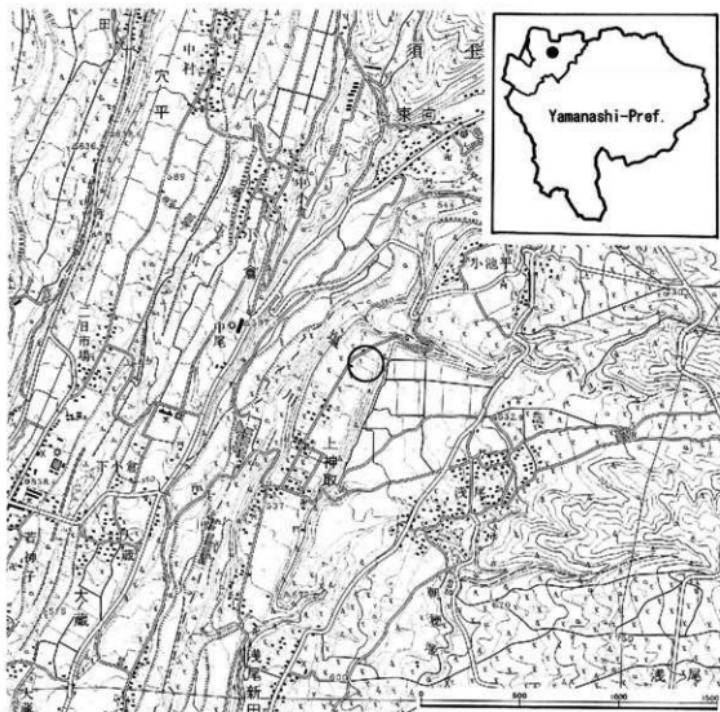


図1 遺跡の位置 1/25,000

3. 調査経過

調査はまず、昨年度調査が中途で終わったB・C-6グリッドの埋戻し土の除去を行った後、C-6グリッドに検出されているSWU-PJ1号住のさらなる広がりを確認するために、東側のD-6グリッド側に幅1mの拡張区を、また、B-6グリッドに確認されたSWU-PJ2号住の広がりを、同じく確認するために、B-5グリッド側に幅1.5mの拡張区を設定した(後に、C-5グリッド側へ1m拡張した)。さらに、新たな調査区として、B-7グリッドを設定し、掘削を開始した(図2・写真3)。

SWU-PJ1号住は拡張区の掘り下げと、昨年の調査を継続し、東西に設定したセクションベルトの除去、覆土中に認められた多量の礫石の精査と、床面出しと柱穴等の確認を行った。残念ながら、調査期間内では、住居址の完掘ができなかったので来年度完掘日指して調査を継続する予定である。

SWU-PJ2号住は、櫛乱や別な住居址と思われる重複もあり、床面を出した段階で調査を終えた。来年度は重複する遺構を含めて調査を継続する予定である。この住居址からは器台形土器が出土したことが注目される。この他、昨年度の調査で確認された、SWU-PJ2号住の覆土中に重複しながら南北方向に走る2号道路状遺構とした遺構及び土坑3基の調査を完了した。

今年度新たに調査区を設定したB-7グリッドは、昨年度C-7グリッドで確認されていた東西方向に走る1号道路状遺構とした遺構の続きがグリッドのほぼ中央部に検出され、南北に走る2号道路状遺構と重複していた。このほか、土坑が4基検出されたが、3号土坑からは中期の大形深鉢形土器の破片が、4号土坑からは完形の底部穿孔倒置深鉢形土器が出土したことが特筆される。調査は、開始当初の数日、激しい雷雨にみまわれたが、そのほかはほぼ円滑に行うことができ、最終日に埋戻して調査を終了した。 (山本輝久)



写真3 発掘区の設定 手前が新たに設定したB-7グリッド

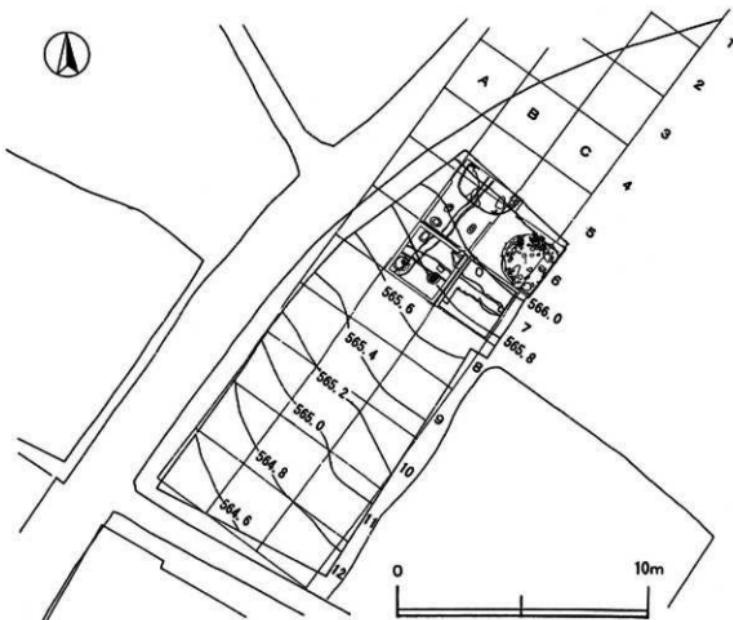


図2 調査地区全体図 1/400



写真4 調査風景

4. 発見遺構と遺物

C・D-6グリッド(図3、写真7・8)

昨年度の調査でC-6グリッド東側に検出されたSWU-PJ1号住は、プランの確認と一部の床面を検出するにとどまった。本年度の調査では住居址の床面および、壁面を検出しプランを明らかにすること、礫群の実測を課題とした。調査したC-6グリッド東側に住居址が広がることからD-6グリッド東側に1m×5mの範囲を拡張し調査を行った。

昨年度、住居址プランのほぼ中央に上層觀察のため東西ベルトを設定したが今回は拡張区にも延長をした。覆土は、表土層の下に、褐色土層(1層)、黒褐色土層(2・3層)の4層が認められる。1層は小礫少量・炭化物を含む。2層は1層より多くロームブロックを含んでおり、3層は2層に類似するがロームブロックがやや少なく、小礫を少量含む。拡張区東壁の覆土は表土層、暗褐色土層(1・3層)、黒褐色土層(2層)、褐色土層(4層)、床面直上のローム質土層の5層に分けられる。1層は2~3mm程度の小礫を少量含み、ロームの小さな塊を含む。2層は1層と類似するが、ロームブロックをより多く含む。4層はローム層と類似しているがローム層よりしまりがない。住居内北東側の覆土中に多量の礫・石が認められたが、丸石や石皿片を含むことから住居廃棄にあたって投げ込まれた儀礼的な行為が想定される。

今回の調査で検出された住居址の範囲は、長軸約4.9m、短軸約4.5mのほぼ円形を呈し、壁高約20~26cmを測る。覆土上面より約25cmで床面を検出した。土坑状の落ち込みや柱穴がいくつか確認された。西側の壁際に、幅約20cmの周溝が一部確認された。東壁際に焼土硬化面を検出できたが、炉址の検出には至らなかつた。おそらく、この付近の調査区外に炉址が存在すると考えられる。壁面は南側の一部を確認できたが、擾乱か他の遺構の重複も考えられるので、来年度の調査の課題としたい。出土遺物は住居内から土器片が出土しているが、大形の破片の出土は少なく確実な時期決定のできる資料に乏しい。井戸尻式期に相当する破片が主体を占めており、若干曾利式期のものもみられるが、住居址の時期は中期中葉・井戸尻式期と想定される。拡張区から石礫、横型の石匙が出土している(写真25・26・27-2左・27-5)。

今回の調査では床面検出と周溝・柱穴などのプランが確認できたが、住居址を完掘することはできなかつた。来年度の調査では、北東側の覆土中に存在する礫群を除去し、確認された住居址の柱穴・周溝等の調査を行い、住居址全体のプランを明らかにして完掘を目指したい。

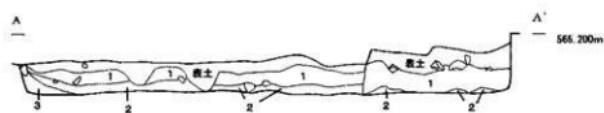
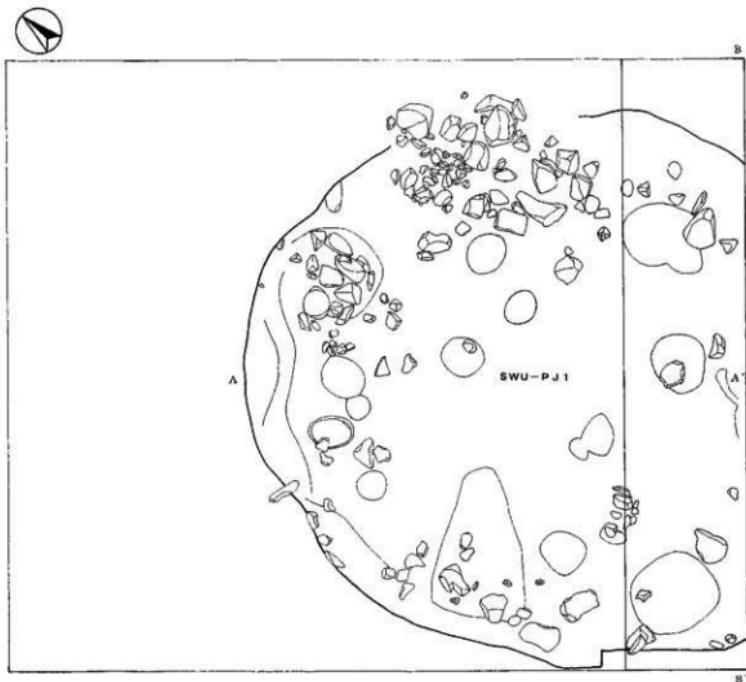
(大野節子)



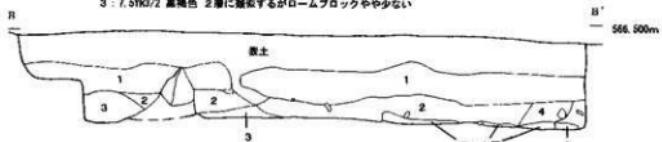
写真5 B-6グリッド北側拡張区の設定



写真6 SWU-PJ1号住 発掘風景



1 : 7.5W2/3 梅色 2~5 cm の小礫・土器・灰化物を含む。しまり・粘性ややなし
2 : 10W2/2 黒褐色 1層に類似するがロームブロックを多く含む
3 : 7.5W3/2 黒褐色 2層に類似するがロームブロックや少ない



1 : 7.5W2/3 梅色 2~3 mm 程度の小礫少量含む。ローム層の小さな塊を含む。しまり・粘性ややなし
2 : 10W2/2 黒褐色 1層に類似するがロームブロックを多く含む
3 : 7.5W3/2 梅褐色 しまり・粘性ややなし
4 : 7.5W4/3 梅色 ローム層と類似するがローム層よりしまりがない

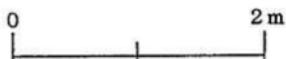


図3 C・D 6グリッド 平・断面図 1/10



写真7 C・D-6グリッド SWU-PJ1号住



写真8 C・D-6グリッド検出 SWU-PJ1号住の東壁土層断面と覆土中の礫石出土状況

B-5・6グリッド(図4、写真9~14)

昨年度の調査を行ったB-6グリッドからはSWU-PJ2号住を確認していたが、今年度の調査では、さらにその広がりを追求するために、北側に1.5×5.5mの範囲でB-5グリッドへ拡張した。

まず、昨年度の調査で検出されていた南北に走る道路状遺構を2号道路状遺構(写真9)と命名し、調査を行った。この道路状遺構はSWU-PJ2号住の上面に重なりB-7グリッドへとつながる。規模は、幅が平均54cm、長さがグリッド内で約6.0m、確認面からの深さが約7cmを測る。底面の硬化面に小礫が伴っていた。この点は、B-7グリッドでのありかたと共通している。時期を特定できる遺物は出土していないため、はつきりしないが、これまでの周辺城の調査から中世末から近世のものと判断される。

SWU-PJ2号住(写真10)は、昨年度の調査では遺構確認面までの調査にとどまっていたため、今年度は拡張した範囲を含めて床面までの調査を行った。今年度の調査で確認された範囲のプランは略円形を呈する。直径約5.1m、確認面からの深さは約17cmを測る。壁の検出状況は、重複や攪乱されているため明瞭ではなかった。また、床面も攪乱を受け、遺存状態は良好ではなかった。柱穴などと思われる落ち込みが確認されているが、調査にまでは至らなかった。また、住居の西側に別な居住址が重複している可能性がある。これらの点に関しては、来年度以降の調査で明らかにさせたい。

SWU-PJ2号住の東壁際付近から器台形上器が出土した。出土状況(写真11)は、床面よりやや浮いた状態でローム質の上層の上に据えてあった。また、北側に隣接して卵形の丸石(写真12)が検出され、窓枠に際して何らかの儀礼的な行為がうかがえる。器台形土器(写真13)は、器台面の直徑約21cm、器高約10cm、台部の高さ約7cm、台部の直徑約17.5cmを測る。器台面が脚部より径が大きいのが特徴である。2個1対の透かし孔が4ヶ所に認められる。孔の外径は約2cmで、その穿孔位置は、器台面近くにあるが、高さは4ヶ所それぞれで一定していない。器台面には粘土質状の白色付着物が認められ、使用のためか、わずかに器台面中央が凹んでいる。また、脚端部は磨滅している。完全ではなく器台面と脚部が一部欠損していた。このことから、この器台形上器は土器製作に関連する可能性がうかがえる。粘土質の白色付着物については、別に自然科学的分析を行う予定である。

床面の西壁際から礫の集中が認められたほか、南壁際からは石組状の施設が検出されている。これらの性格は不明である。この堅穴住居址の所属時期は、大形の出土上器は少なく判断に苦しむが、中期中葉・藤内式～井戸尻式期に相当するものと考えられる。

ほかに、B-6グリッドから土坑が3基検出された。1～3号土坑と命名し、調査を行った(写真14)。

1号土坑はグリッドの南東部に位置する。平面形は梢円形を呈する。土坑の規模は、長軸が約84cm、短軸が約44cm、確認面からの最大深度は14cmを測る。覆土は3層からなり、暗褐色土(1層)・黒褐色土(2層)・暗褐色土(3層)である。2号土坑はグリッドの南西部に位置する。平面形は梢円形を呈する。土坑の規模は、長軸が約95cm、短軸が約68cm、確認面からの最大深度23cmを測る。覆土は2層からなり、黒褐色土(1層・2層)である。覆土上層から破砕された状態で磨石が検出された。3号土坑は、グリッド北西部に位置する。平面形は梢円形を呈する。土坑の規模は、長軸が約86cm、短軸が約57cm、確認面からの最大深度は56cmを測る。覆土は2層からなり、暗褐色土(1層)・褐色土(2層)である。10cm角の礫が底面から、小礫が覆土から検出されている。これらの土坑内からは出土遺物がなかったため詳しい時期は不明であるが、覆土層から判断して縄文中期のものと判断される。

(右川真理子)

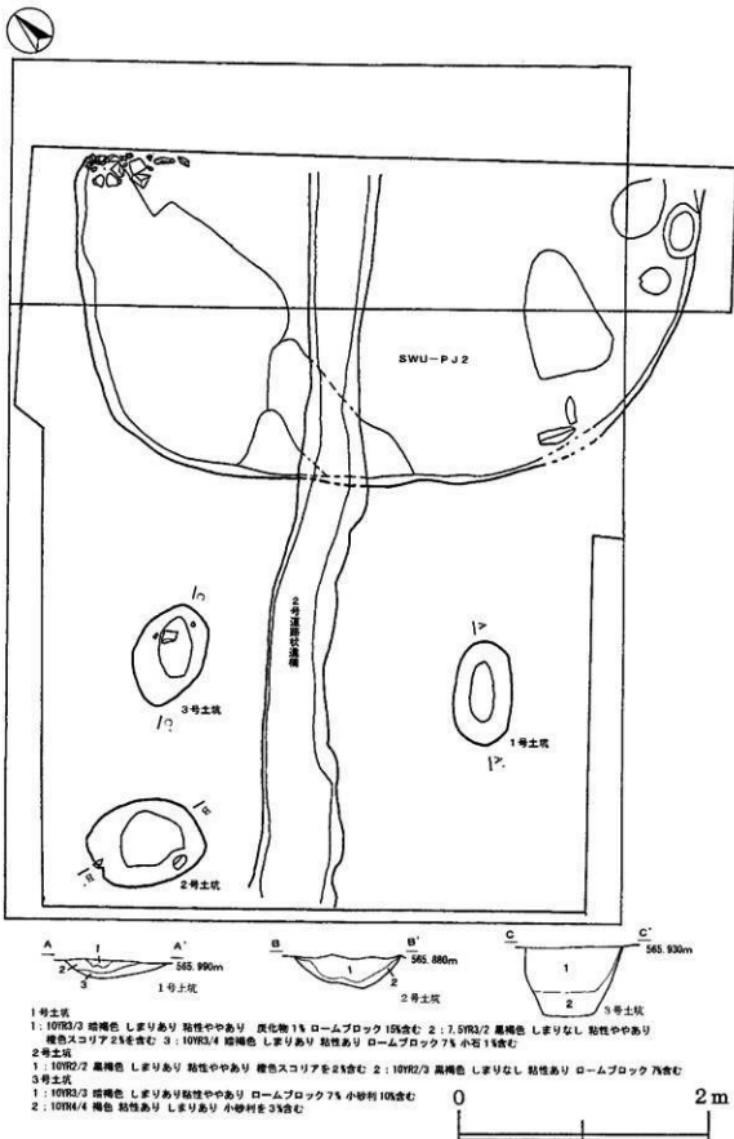


図4 H-5・6グリッド平・断面図 1/10



写真9 B-5・6グリッド 2号道路状造構・1～3号土坑・SWU-PJ 2号住確認面



写真10 SWU-PJ 2号住



写真11 器台形土器 出土状況



写真12 器台形土器と丸石出土状況



写真13 器台形土器



写真14 B-5・6・7グリッド全景 北側から

B-7グリッド(図5・6、写真15~24)

B-7グリッドは、今年度新たにB-6グリッドの南側、C-7グリッドの西側に設定し、調査したグリッドである。

検出された道路状遺構は、東西方向に走るものと南北方向に走るもの2条である。東西に走る道路状遺構を1号道路状遺構、南北に走る道路状遺構を2号道路状遺構と命名した。1号道路状遺構はC-7グリッドから続く(写真15)。規模は、幅が平均94cm、長さがこのグリッド内で約4.40m、確認面からの深さが平均14cmを測る。覆土は暗褐色土の1層である。底面に硬化面に伴う小窪が多数検出された。2号道路状遺構はB-6グリッドから続く(写真16)。規模は、幅が平均64cm、長さがこのグリッド内で約4.40m、確認面からの深さが平均6cmを測る。覆土は黒褐色土(1・2層)の2層である。底面に鉄平石が検出された。鉄平石は長辺が56cm、短辺が44cmを測り、方形を呈する。道路状遺構に伴うものか、鐵文時代にさかのばるものかは来年度の調査で判断したい。1号道路状遺構と2号道路状遺構は重複し、2号道路状遺構が上部、1号道路状遺構が下部で検出されたため、1号道路状遺構が古いと判断した。1号道路状遺構、2号道路状遺構共に年代を特定できる遺物は出土していないが、前述したように周辺の遺跡の状況などから中世末から近世と判断した。

検出された土坑は4基以上あるが、調査を行ったのは4基のみで1~4号土坑と命名した(写真19)。1号土坑はグリッドの北部に位置する(写真17)。平面形は隅円方形を呈する。規模は、長軸が約92cm、短軸が約64cm、確認面からの深さが最大32cmを測る。覆土は暗褐色土(1層)・黒褐色土(2・3層)・褐色土(4層)の4層である。底面に小縫群が検出された。出土遺物は上器小破片が数点出土している。2号土坑はグリッドの東端に位置する(写真18)。平面形は調査途中のため不明である。規模は今年度の調査終了段階で、長軸が約1.40m、短軸が約88cm、確認面からの深さが最大26cmを測る。覆土は暗褐色土(1層)・御所褐色土(2層)・褐色土(3層)の3層である。底面に長大な鉄平石が検出された。調査中のため来年度も引き続き調査を行い、その性格を明らかにしたい。3号土坑はグリッドの西に位置する(写真20)。平面形は円形を呈する。規模は、長軸が約1.32m、短軸が約1.26m、確認面からの深さが最大22cmを測る。覆土は暗褐色土(1層)・黒褐色土(2・4層)・黄褐色土(3層)・褐色土(5層)の5層である。大形石や破碎された深鉢形土器が出土した。破碎された深鉢形土器の文様は口縁部が無文で頸部にX字把手を有する。4号土坑はグリッドの南部に位置する(図6、写真21~23)。平面形は梢円形を呈する。規模は、長軸が約1.06m、短軸が約88cm、確認面からの深さが最大55cmを測る。覆土は褐色土(1・2層)・暗褐色土(3・4層)の4層である。1・2層には5mm程度の小縫を含み、4層は粘性が強い。上面から裏面に多凹石をもつ石皿の半欠品(写真27-6)が伏せられた状態で出土し、その下面から底部穿孔倒置深鉢形土器が検出された(写真24)。この土坑は道路状遺構の調査後、1号道路状遺構の南側を掘り下げ、遺構確認を行ったところ、確認に至ったものである。底部穿孔倒置深鉢形土器は、口径が約50cm、高さが約52cmの大形深鉢形土器で底部中央に径約1cmの小孔が外面から穿たれている。頭部がくびれ、口縁部が外反し、胴下部がやや張る器形を呈する。文様は口唇部に6単位の突起・小突起、口縁部に隆脊によるつなぎ弧文・半円形区画、区画内に沈線文、頸部以下に沈線による区画、区画内に矢羽状などの沈線文を充填し、底部は無文である。中期後葉・晉後期に相当しよう。

他に、グリッドの南端から完形の小形鉢形土器(写真27-1)や磨石、黒曜石製石錐(写真27-2右)などが出土している。小形鉢形土器は沈線による区画、列点を施し、底面に網代底をもつ。晉後期式期に相当しよう。

このグリッドは2号土坑などが調査途中のため、来年度も引き続き調査を行う予定である。

(岩井良栄)

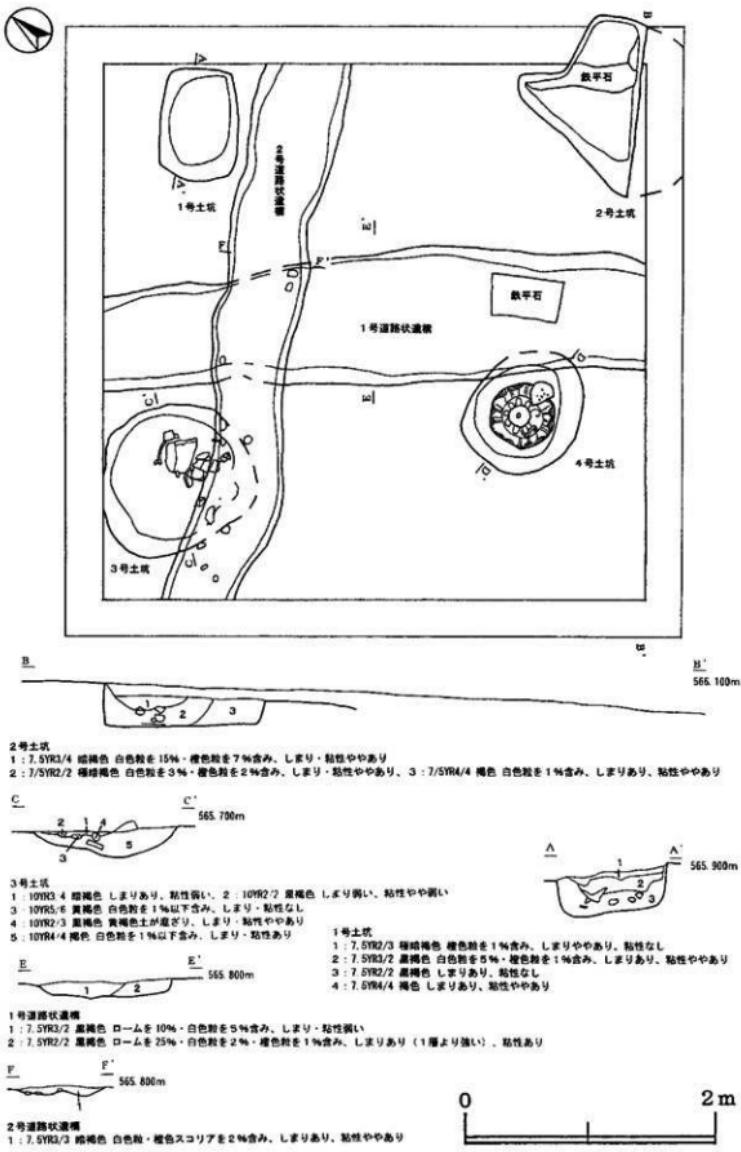


図5 B-7グリッド 平・断面図 1/40



写真15 B-7グリッド 1号道路状遺構



写真16 B-7グリッド 2号道路状遺構



写真17 B-7グリッド 1号土坑底面蝶群出土状況



写真18 B-7グリッド 2号土坑



写真19 B-7グリッド 1~4号土坑



写真20 B-7グリッド 3号土坑



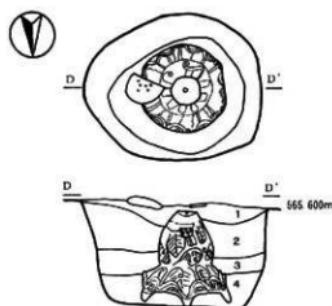
写真21 B-7グリッド 4号土坑 半截状況



写真22 4号土坑内 底部穿孔倒置深鉢形土器



写真23 4号土坑内 底部穿孔倒置深鉢形土器



4号土坑

- 1 : 10R4/6 棕色 小標を少量含み、しまり・黏性なし
- 2 : 10R4/6 棕色 小標・白色スコリアを少量含み、しまりなし、粘性ややあり
- 3 : 10R3/4 棕褐色 しまりややなし、粘性あり
- 4 : 10R3/4 棕褐色 しまりややなし、粘性強い



図6 B-7グリッド 4号土坑 平・断面図 1/30 写真24 4号土坑内出土 底部穿孔倒置深鉢形土器



写真25 SWU-PJ 1号出土 石器



写真26 SWU-PJ 1号出土 石匙

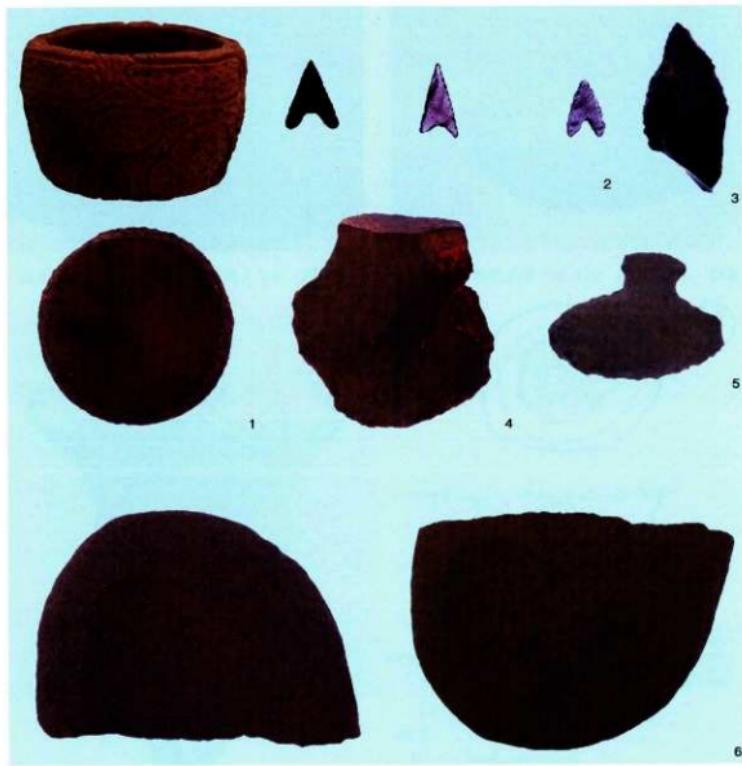


写真27 主要出土遺物

5. まとめ

2007年度発掘調査概報でも触れたように、諏訪原遺跡は、これまでの北杜市教育委員会(旧・明野村教育委員会)の8次にわたる発掘調査により、大規模な中期環状集落址であることが明らかにされている。調査対象箇所となった地区は、面積約700m²であり、環状集落の北側部分から、中央広場を含むエリアと考えられる(調査地区的範囲と周辺の調査状況については、2007年度発掘調査概報の図2を参照願いたい)。

今年度は、昨年度C-6グリッドとB-6グリッドに検出された2軒の竪穴住居址と土坑の継続調査と、新たにB-7グリッドの調査を行った。

C-6グリッドに検出されたSWU-PJ1号住は、東側に拡張して調査した結果、ほぼ2/3ほどの範囲を明らかにすることができた。この住居址の覆土中には、丸石を含む礫石が堆積しており、住居廃絶に伴うなんらかの儀礼的な行為が行われていたことが考えられる。今年度は、礫石の実測と床面出し、柱穴等の確認までで調査期間が終わってしまったので、来年度の調査で完掘を目指す予定である。時期的には、井戸尻式段階の住居址と思われるが、出土遺物の精査のうえ判断したい。

B-6グリッドに検出されたSWU-PJ2号住は、北側に拡張して約1/2の範囲を明らかにすることができた。壁・床面の侵食が多く、また、一部別の住居址と思われる遺構が重複していた。来年度はそれらを含めて調査を継続したい。本住居址の東壁近くには、ほぼ完形の器台形土器が出土したことが特筆される。時期的には、藤内Ⅱ式から井戸尻式段階のものと考えられるが、今後、類例と他の出土遺物の検討から判断したい。柳原功一の最近の研究(柳原 2004)によれば、山梨県内では、破片を含めて30遺跡から器台形土器が出土しているが、今回の発見により、器台形土器研究のうえで貴重な事例を追加することができた。

今年度新たに調査を着手したB-7グリッドからも貴重な成果をあげることができた。重複する2条の道路状遺構の下面に4基の土坑が確認された。このうち、3号土坑は平石とともに曾利Ⅱ式期に相当する大型深鉢形土器が破碎状態で出土しており墓壙の可能性が考えられる。また、4号土坑からは、埋葬墓棺と思われる底部穿孔されて倒置状態で出土した、器高約52cmを測る曾利Ⅲ式期の大型深鉢形土器が特筆される。調査時の所見では単独の土坑と判断したが、住居内埋設の可能性もあるので、来年度精査する予定である。また、2号土坑とした遺構は底面に細長い鉄平石が検出されており、プラン等も明瞭でないので、同じく、来年度の調査でその性格を明らかにさせる予定である。

(山木輝久)



写真28 諏訪原遺跡 小・中学生発掘体験 08.8.9



写真29 埋め戻し後の全景 08.8.16

調査参加者名簿

教 員 山本暉久(大学院生活機構研究科教授)・小泉玲子(人間文化学部歴史文化学科准教授)

助 手 石井寛子(人間文化学部歴史文化学科)

大学院生 石川真理子(生活機構研究科生活文化研究専攻修士2年)・岩井良栄(生活機構研究科生活文化研究専攻修士2年)・大野節子(生活機構研究科生活文化研究専攻修士2年)

歴史文化学科

学 部 生 3年 石野めぐみ・小島麻紗子・間なま・高野 舞・吉田沙織・井口真理子・篠田夏実
倉島瑞季・松木小枝・結城晶子

2年 相子朝香・遠藤文香・大森咲子・岡部可那子・掛飛智香・上谷宏美・寺西さとみ
佐藤和可菜・間根麻記子・竹中菜奈子

卒 業 生 領家玲美(相模原市教育委員会・大学院生活機構研究科生活機構学専攻博士課程2年)
大沼香織(O G)・大塚泰徳(O G)・白岡町教育委員会



写真30 前半参加者記念写真



写真31 後半参加者記念写真

諏訪原遺跡関連文献

佐野 隆 1996 「発掘調査速報 諏訪原遺跡」『年報一平成7年度ー』 北巨摩郡市町村文化財担当者会

佐野 隆 2003 「発掘調査速報 諏訪原遺跡」『八ヶ岳考古一平成14年度年報ー』 北巨摩郡市町村文化財担当者会

佐野 隆 2004 「発掘調査速報 諏訪原遺跡」『八ヶ岳考古一平成15年度年報ー』 北巨摩郡市町村文化財担当者会

昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科 編 2008 『山梨県北杜市明野町上神取 諏訪原遺跡発掘調査概報 2007年度』

その他参考文献

櫛原功一 2004 「台形土器の研究」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第12集, 261-284頁

山本暉久 2007 「住居址内底部穿孔倒置埋設土器の一様相—神奈川の事例を中心としてー」『列島の考古学II』
(『渡辺誠先生古稀記念論文集』), 371-382頁 渡辺誠先生古稀記念論文集刊行会

報告書抄録

ふりがな	やまなしけんほくとしあけのまちかみかんどり すわはらいせきはつくつちょうさがいほう						
書名	山梨県北杜市明野町上神取 諏訪原遺跡発掘調査概報 2008年度						
著者名							
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	山本耀久・小泉玲子・石川真理子・岩井良栄・大野節子						
編集機関	昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科						
所在地	〒 154 8533 東京都世田谷区太子堂1-7 昭和女子大学 TEL 03-3411-5373						
発行年月日	西暦 2008年12月15日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ○××	東経 ○××	調査期間	調査面積	調査原因
すわはらいせ き 諏訪原遺跡	やまなしけん ほくとしあけ のまちかみか んどり 155 8-1	19-209 01-014	35度 48分 2秒	138度 26分 37秒	20080804 ~200808 15	約89m ²	縄文時代環状集落址形 成過程の研究にかかる 学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
諏訪原遺跡	集落址	縄文時代 近世	堅穴住居址 2、土坑 7 道路状遺構 2ほか	縄文土器、土製品 石器 近世陶磁器	縄文時代中期の大規模環状集落址 で、2007年度より、昭和女子大学人 間文化学部歴史文化学科が調査主体 となって、中期環状集落形成過程 解明のため、学術発掘調査を継続し ている。本年度は、2007年度の調査 で検出された縄文時代中期の堅穴住 居址 2軒の継続調査および確認され たピット・土坑ならびに近世と思わ れる道路状遺構の調査を行った。2 号坑からは堅台形土器が、B-7グ リッドに検出された4サト坑から底 部穿孔側面深鉢形土器が出土したこ とが特記される。		



B-7 グリッド 第4号土坑内 底部穿孔倒置深鉢形土器

山梨県北杜市明野町上神取
諏訪原遺跡発掘調査概報
2008年度

発行日 2008年12月15日

発行者 昭和女子大学人間文化学部
歴史文化学科

〒154-8533 東京都世田谷区太子堂1-7

Tel 03-3411-5373

FAX 03-3411-7059